

パンジーの花束

NORIKO

今月、実家がなくなる事が決まった。

2年前から高齢者施設に入居している父が、ずっと空き家状態になっていた3LDKの自宅を手放す決心をしたためだ。

この猛暑の夏、幾度か通って実家の片付けをした。9年前に他界した亡き母の遺したものも、ほとんどそのままだった。父の仕事の関係で引っ越しが多かった我が家だが、十数回の転居にもかかわらず、ずっと我が家にあり続けた家具や食器や、昭和の香りのするさまざまなモノたち。母のタンスの着物や洋服、使いかけの化粧品。私が引き取るにも限りがある。両親の築いてきたささやかな暮らしの証拠の品々が、私が育った家庭の歴史が、みな捨てられていくのかと思うと、切なく、心が傷む。気持ちがざわつく。

そんなモノたちの中から出てきた、晩年の母が作った押し花の作品。額装された十数点が、押入れの奥にしまわれていた。桜、ひまわり、ガーベラ、月下美人などの大作から、名前のわからない野の草花の小品まで。母は花が好きの人だった。

そんな作品群の中でひととき私の気持ちを捕らえたのは、パンジーの小さな額だ。

私が中学3年生だった数十年前の記憶がよみがえる。高校受験の季節。生まれて初めての受験、初めての合格発表。それは、本命の学校ではない、第二希望の高校の合格発表の日のことだった。ちよつと遠いその学校まで電車を乗り継いで、母が代わりに発表を見に行ってくれた。帰宅し、合格通知の入った封筒といっしょに私に手渡してくれたのは、色とりどりのパンジーの小さな花束だった。

うれしかった。私にとって、人生で初めてもらう花束だった。当時は思いを馳せることはできなかつたけれど、あの花束を花屋の店先で買った時の母

の気持ちを、いま想像してみる。

思えば私は、母に褒められた記憶というものが無い。合格を大きく喜んでもらったという記憶も残っていない。けれど、あのパンジーの花束を母が買ってきてくれた、という記憶だけは、今でもはっきりとよみがえってくるのである。

あの花束を私に手渡す時、おそらく母は「おめでとう」とだけ、そっけなく言ってくれたのだと思う。今の私は、その言葉の背後に隠された母の思いを勝手に妄想する。

「よくがんばったね」

「ちゃんとまじめに取り組んできたのを知っているよ」

「できてもできなくても、合格でも不合格でも、どっちだってほんとはいいんだけどね」

「でもやっぱり、うれしいよ、ほっとしたよ、おめでとう！」

パンジーの押し花作品を作りながら母は、小さな花束を娘のために買ったあの日のことを思い出していただろうか。

今月いっぱいでも人手に渡る実家から、母の遺したパンジーの押し花の額を、私は持ち帰った。